九

海音寺潮五郎全集

海音寺潮五郎全集　第九巻
二本の銀杏
全二十一巻・第一回配本
九〇〇円

昭和四十四年十月二十日発行
著者　海音寺潮五郎
装幀　芹澤銈介
口絵　中尾　進
発行者　大田信男
印刷所　凸版印刷

発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

検査済
44.12.4
庶務課

目次

二本の銀杏　三
柳沢騒動　三九七

二本(ふたもと)の銀杏(ぎんなん)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

昭和三十四年十月二十一日―三十六年一月六日「東京新聞」

逃散

村は薩摩の北端にあった。肥後に境を接していた。山また山にかこまれた小さな盆地だ。海には一番近い道を行っても八里あった。

「赤塚ン衆は、海の魚は塩漬もんしか食うたことはなか。ピリッと舌を刺すくらいになったやつでなかと、よろこばんぞ」

と、海近い土地の人々が笑っているほどであった。

村の中ほどに小高い山がある。南九州ではめずらしくない火山灰の堆積した台地で、雑木が生いしげっている。城山と呼ばれている。城のあったのは戦国時代のことで、江戸期に入ってからは一国一城の法規によって何もかも撤去されて、単なる丘になってしまったのだが、名称だけが未練がましくつづいているのだ。

この城山の麓に武家部落がある。薩摩藩で外城士また郷士と呼ばれている人々の部落である。

外城士あるいは郷士は、藩士であるにはちがいないが、鹿児島城下に居住している城下士とはずいぶんちがった生態を持っている。城下士は他藩の武士と同じく純然たる消費階級だが、この連中は武士であると同時に百姓であった。作りどりをゆるされた土地、つまり無税の土地を私有していて、自ら耕作もすれば、下人と称する家来筋の者に小作もさせて生活している。

彼らの身代はいろいろだ。自作の収穫と小作料を合わせると年間五百石も収入のあるほど豊かな者もいれば、せいぜい五石か六石の収入しかない家もあった。

しかし、彼らの住宅は、貧富を問わず、大体の規格があった。邸地は必ず路面から五六尺上り、広さは三百坪から五百坪どまり、まわりにこの地方に多い泥灰岩の切石の石塀をめぐらすか、子供の頭ほどの大きさの自然石を五六尺の高さに積み上げた石垣の上に、姫垣としてユス、カナメ、あるいはこの地方で金竹といっている蓬莱竹の生垣をめぐらしている。

家屋は邸地のほぼ中央にあって、四室か五室、せいぜい六室、屋根は多くは茅で厚く葺き、瓦屋根は至って少ない。

前圃は梅・桃・杏・柿・蜜柑等の果樹園となり、後圃は菜園となって、自給自足の出来るしかけになっている。

身代に応じて白塗の土蔵がいく戸前かあり、厩舎もある。貧しければ耕作馬しか飼っていないが、豊かであれば乗馬も飼っており、厩舎にとなり合って、この地方のことばでデクヮン（田官？）と呼ばれている下男の寝場所もある。

赤塚村の郷士部落は別段にとり立てて言うほどの特色はない。一口に百二外城と称せられて、薩藩領内に百二の

数があるといわれている郷士部落と、ほとんど変るところはないが、ただ一つ目立つものがあった。

この部落の東西の両端に近く一本ずつ銀杏の巨樹がある ことであった。東方のは郷士頭北郷家の庭先にあり、西方のは上山家の門側にあった。ともに二百年内外の樹齢をたもって、おとな二人で手をまわしても一尺ほどあまるほど大きかったし、部落の両端に七八十尺もの高さにそびえて空をはらっているさまは、落葉時にも、青葉時にも、黄葉時にも、それぞれにかなりな壮観であった。

この物語はこの双樹のある両家にからまって展開するので、作為にすぎるようで、筆者としてはいささか気がひけるのだが、事実だから書かざるを得ない。この双つの樹は雄木と雌木であったのだ。

ご承知の通り、ジュラ紀から生きのこっているこの植物は動物に近似した性質をもっている。晩春の開花期に雄木は花粉から精虫を出し、雌木の花は卵子をつけ、風にのって運ばれる雄木の精虫が雌木の卵子に付着して生殖結実するのだが、時として数里をへだてて交配し合うところから、昔の人にはずいぶん神秘的に思われたらしい。中国にも、日本にも、この樹にからまる神怪談が多数語り伝えられている。

北郷家のが雄木、上山家のが雌木であった。好晴の日のつづく秋の季節になると、上山家の樹にるいるいと実がなり、やや強い風が吹くと、終日終夜、門の屋根、街路、庭、前圃のきらいなく、精液に似た悪臭を放つ、半透明のどろどろな物質につつまれた実をおとした。

上山家では、それを丹念にひろいあつめて、どろどろを洗い去り、ほし上げてきれいな実にして、半分を北郷家に、

「おかげで今年は豊作でごわした」

とか、

「今年は不作でごわした」

とかいう口上とともにとどけた。

すると、北郷家では、

「これはこれは、ごきんとう（金当・几帳面）なことでごわす。こちらは種をつけただけで、一向かまいつけもせん不埒をはたらいていもすのに」

と、笑って受け、かんたんな酒食をそなえて、主客軽く一酌する習わしであった。先祖代々、もう何代もつづいているのであった。

天保八年の晩秋の一日、黄葉した大銀杏の葉が、明るく寂かな日ざしの中にしきりに散る午を少しまわった頃、部落の郷士らの重立った連中が十数人、北郷家の客間に居ならんでいた。

正面に主人の北郷隼人介、郷士らはその左右にカネになって居流れている。木綿か、せいぜいつむぎだが、小ざっぱりとしたものを着、袴をはいている。国の習いですそ短かだ。皆肩をそびやかせていた。これも国の習いだ。改ま

った服装をすると、つい兵児時代の気を負うたすがたになる。

これは郷士なかまの、いわば長老格の連中で、腰がかがみ気味になったり、眉が白くなったりしている老人が大半であった。

敷居をへだてた下座敷に、この国で兵児といわれている麦帯前の青年らが五人すわっていた。長老連も相当無骨な姿だが、兵児らは一層粗豪な感じだ。手首から二三寸上るあたりまでしかないほど短く袖を仕立てた薩摩がすりの着物に白木綿の帯、うんと短くはかまをはき、腰に手拭をぶらさげている。

申し合わせたように脇差は短く、大刀は太く長く、直刀にまごうばかりにそりが少ない。お家流儀とこの国でいわれている示現流にはこんな刀が適しているのである。

この若者らの中にただ一人、髪の結い方がちがって、月代をおかず総髪にして結い上げている青年がいて目立ったが、そればかりでなく、この青年はなかなか異色があった。

第一、体格が雄偉だ。ひきしまったからだは、たけが高く、肩はばがひろく、いかにも鍛えのきいた感じだ。第二に容貌がりっぱだ。大きくて光りの強い目や、高い鼻梁や、大きな口や、ひきしまった浅黒い頬が、おそろしく精悍な感じであった。年頃は二十五六と見えた。

青年らと同じように敷居ぎわに膝をそろえてすわっているのだが、何となく総髪の青年だけが他の青年と対立しているようなものが感ぜられた。

誰も一ことも口を利かない。長老らの間から、時々煙草盆をはたく音が聞こえるだけであったが、やがて、正面の北郷隼人介が、せきばらいとともに口をひらいた。

「ことがらは各々ご承知のことでごわすが、順序でごわすから、一応、当事者らの陳述を聞くことにしもそうな」

と、長老らをかえりみた。

隼人介はまだ三十四五だが、さすが代々の家柄だけに、容貌もりっぱであれば、性質もおだやかで、おのずから長老の風がある。

隼人介のとなりにすわっている小柄な老人が、白く長い眉をふるわせ、短気げにきせるで灰吹きをひっぱたいて、しわがれた声で言った。

「その必要はごわすまい。事がらはすでにはっきりしとる。事理をただす段階ではごわはん。罪の計量をなすべきでごわす。さっそくに裁きにかからるるがようごわす。藩庁の命を奉じてやっとることを妨害したのでごわす。源昌房が悪いにきまっていもす」

うなずく者もあり、首をひねる者もあった。

隼人介は決しかねて無言であった。

総髪の青年は端然とした姿勢で、膝に手をおき、目を閉じていたが、その目をみひらき、キッと老人を見て言った。

「市郎右衛門サアは心得ンことを申さるる。拙者は、今日はお裁きとのご通達をいただいて、こうしてまかり出でたのでごわす。裁きとは悪いか悪くないかを決定することでごわす。しかるにその以前、拙者が悪いと仰せられるとは何事でごわす。士分の者にたいして、無礼とはお考えにならぬか。仮に百歩をゆずって、すでに罪科ありと決定されたとするならば、その罪の計量の場に罪人たる拙者が列席するということがごわしょうか。年甲斐もなかことを仰せらるる」

調子はおだやかだが、意味はしんらつであった。

老人は腹を立てたが、言いかえすことが出来なかった。無暗に煙草を吸っては、はげしく灰吹きをたたきつける。

隼人介は青年のいうことを至当と認めたが、それでもおさえた。

「ゆるしなくして発言してはならん」

「は」

青年はまた瞑目のすがたになった。

十数年この方、薩摩は百姓の逃散が相ついでいる。民政の悪さから取り立てがきびしいからである。三面を海にかこまれている国だから、中部以南では逃げることが困難なため、苦しくてもとどまっているが、北部は陸続きで他領に近い。逃散者が相つぎ、耕す者のなくなった耕地が無暗にふえ、それが急速に原野化しつつある。

田租を最も主要な財源としている封建大名の経済はこれではなり立たない。

藩政府はきびしい取締り令を出し、国境地帯の郷士らに命じて、これを取締らせている。

赤塚村の郷士部落から三里ほど離れた地点に、関所がある。国境の峠道から少しさがった谷間にあるのだ。赤塚村の郷士らの藩に負うた最も大きい任務は、関所を守ることだ。先祖代々、彼らはこの任務を負うている。だから、十日目毎の交代で、ここに出かけている。

薩摩は秘密の国だ。特別に藩の許可がないかぎり、他国人を一切入れないきまりになっている。赤塚村の郷士らが、関所番を最も重い任務としている以上、単に関所だけを守っていればいいというはずはない。関所以外の国境線をこえるものはみな関所破りだ。藩から特別なさしずがなくても、とりしまらなければならない。ご領内の百姓らを逃散させるなど、職務怠慢と責められてもしかたがないわけだ。彼らは恐れ入ってお受けして、それぞれ受持区域をきめて巡回をはじめた。もう十年から上にもなることだ。

ところが、昨日のことだ。ここにいる四人の青年らが受持区域の山中を巡視していると、男女子供まじり十人ばかりの百姓らが、それぞれに鍋釜や衣類包みらしいものを背負って、谷川沿いの細道を、球磨境の方に行くのを見つけた。そこで、追いかけた。

百姓らはさとって、飛ぶ速さで逃げ出した。こちらはそう出ることを予想していたので、一人が先きまわりしてい

ると、その鼻先きに逃げて来た。
「とまれ！」
おどり出してどなりつけると、一行のうしろをまもって逃げて来つつあったひときわ屈強な百姓が駆けぬけて来て、柄長の山鎌をふりかざして抵抗する気勢を見せた。
こちらはかっとなった。
「なまいきな！」
刀をぬきはなって、斬ろうとしたところ、とつぜん、上の崖から長い棒が飛んで来て、目の前におちてはずみ上った。
驚かんわけに行かん。
「あっ！」
と飛びすざると、おりあしくそこは谷川のふちであった。足をふみすべらせ、しぶきを上げて早瀬にころがりこんでしまった。
そのすきに、百姓共は足のかぎりに逃げる。あとのものが追いかけたが、つい一二町で球磨の領分だ。ほんの少しのことで追いつけなかった。百姓らは、球磨領に入ってしまった。
すでに他領に入ってしまった以上、ふみこんで捕えるわけに行かない。必ずあとでどえらいめんどうがおこる。歯がみしながら引きかえした。
百姓らをとりにがしたことが口惜しかったのは言うまでもないが、崖の上から六尺の金剛杖を飛ばしてじゃましたのが郷士なかまの源昌房であったのは、意外でもあれば、心外でもあった。
源昌房はその日の巡回なかまではなかった。彼は二日前に、一年ぶりに上方からかえって来たばかりというので、まだそうした勤務は免除されているのであった。だのに、彼はいつそこに来ていたのか、ものものしい修験者姿で崖の上に突っ立っていて、かんじんの時、突如としてじゃまをしたのである。
青年らは腹を立てて、源昌房をなじったが、源昌房は、
「おいは百姓共を逃げさせようと思うてしたのではなか。おいはただ、おはんらがあの百姓を殺そうとするのをとめようとしただけのことじゃ。思いもかけん結果になって、百姓共をとりにがさせたことはまことにすまんが、おいの真意は唯今申した通りじゃ。聞きわけてもらいたか」
という。
しかしながら、もし源昌房がその言う通りの心であるなら、彼もまた百姓らを捕えるべく追いかけねばならなかったはずであるのに、さらにその風はなかったと、青年らには思われた。
そこで、郷士頭に訴え出たので、郷士頭は長老らを召集し、当事者らを呼び出したという次第であった。
ここで、かんたんに源昌房の身分について説明する必要があるようである。
薩摩に兵道家というのがある。武士と山伏を兼ねている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

者である。これを兵道家というのは、戦さの場合、陣中で敵軍を呪詛調伏する修法を行のうことを職とするからである。呪詛や調伏などということがはたして効験のあるものかどうか、今日の常識ではもちろん信ぜられないが、この時代にはかたく信ぜられ、疑うものは一人もなかった。

彼らは城下士の中にもいれば、郷士中にもいる。平生は髪を総髪にしているだけで、普通の武士とかわらない服装をしているが、宗教上の儀礼の時だけ、修験者の服装になる。

彼らのあるものは神社の別当をかねているが、そうでないものもいる。神社を持たないものは、屋敷内に大日如来を祀った堂を持ち、朝夕その前で勤行するのである。

源昌房はその兵道家であった。本名は上山一平久経。部落の西のはずれにあるあの大銀杏のある上山家の当主であった。この時二十六歳であった。

隼人介がせきばらいとともに、

「順序じゃ。やはり一応陳述を聞かんければ、話の進めようがなか」

といって、原告たる青年らに発言をうながした。

「わしが総代で言いもす」

と、一人がよどみのないことばで、きのうのいきさつを述べた。

「つぎはそなたじゃ」

源昌房は、きのう若者らにしたと同じ弁解をくりかえしたが、さらに言いそえた。

「拙者は百姓らをあわれと思うのでごわす。各々方もうわさには聞いてごわしょう、天保と年号が改まってこの方、東日本は災厄つづきでごわす。あるいは長雨のため、あるいは冷害のため、不作の年がつづき、米の値段が天井知らずに騰貴し、田舎では百姓一揆しきりにおこり、江戸・大坂・京などでは、打ちこわしとて、窮民らが大挙して米屋や富豪の家を襲撃破壊することがくりかえされたのでごわす。

これは三年までのことでごわすが、四年になると、また冷害のため、九州をのぞく諸国一円の凶作となり、奥羽と東山道とはとりわけはなはだしく、文字通りに一粒もみのらず、餓死するもの数万、人々相食むという惨烈なこととなりもした。田舎だけではない。将軍家のお膝もとであり、天下の物資の集まる江戸の市中にさえ餓えて死ぬものが出る始末。この時もまた大都会には打ちこわしがおこり、田舎には百姓一揆がおこりもした。

五年、六年は平年の作がらでごわした故、一応の小康は得ましたが、去年はまた夏の土用に冬着物を着ねばならぬほどの年であった上に、大暴風雨におそわれた国々が多かったため、中国路から東の国々はまたまた飢饉となり、一揆のおこった国々は一々数えきれぬほどでごわした。米不

で、京だけでも餓死したものが五万六千人をこえたと申す。ついに、今年になって、大坂では大塩平八郎が悪役人と悪商人共とを征伐するを名として兵乱をおこすに至ったのでごわす」

この快弁が、突如さえぎられた。

「ようまわる舌じゃのう。しかし、わしらも皆知っとることじゃ。こと新しかことのように言うことはなか」

さっき源昌房に言いつめられた眉の白い老人であった。にがにがしげな顔をしていた。

源昌房はひるまない。

「いかにも、みなさまご承知のことでごわす。しかし拙者は見て来たのでごわす」

貴殿らは不作でもなければ凶作でもない平和な土地にいて遠いうわさ話に聞いているにすぎなかろう、拙者はこの目でまざまざと見て来たのだ、感銘がちがうと言いたげであった。

老人は負けてはいなかった。せせら笑うような調子で言う。

「なるほど、そなたは見て来たろう。一年の余も京の本山にいたのじゃから。じゃがだの、そなたが今長々としゃべり立てたことと、昨日そなたがしたことと、一体なんの関係があッのじゃ。昨日のことは、よその国の飢饉なんどとはなんの関係もなかことじゃぞ」

源昌房はむっとしたようであったが、わずかに微笑して見せた。

「もう少し言わせていただきもそ。――拙者は先刻、百姓らをあわれと思うと申しましたが、先ずそのことをお心におとめおき願いたい。以上申し上げた東日本の飢饉・一揆・打ちこわし等は、申さば天災でごわす。もちろん、かねての政治の不適当、悪商人共の貪欲等も手伝っている点はごわすが、大方は天災と申してよろしい。

ところが、当九州、とくにお国は暖国のことゆえ、冷害ということを知らず、ために不作もなく、凶作もありませなんだ。だのに、打ちこわしや一揆などの不祥事こそなけれ、年々に百姓共の逃散がつづいていもす。

人間は誰でも生まれ故郷が好きでごわす。山にも川にも、一木一草に、先祖以来のゆかりがからみ、なつかしさがこもっている。これを捨てて、なじみのなか他国にさすらい行く者がこの十余年絶えぬとは、なにが故か。尋常一様のことではごわはんぞ。各々方によく考えていただきとうごわす。

拙者が百姓をあわれと思うたと申したのはここのことでごわす。拙者は百姓を逃がす気はなかった。ただ殺されるのを助けたいとばかり思うたのでごわす」

源昌房は口をつぐんで、しずかな目で人々を見まわした。どんな反応を見せるか、観察している目つきであった。

青年の一人が、源昌房の方に、ぐいと膝をねじ向けた。

「おはんは何を言おうとしているのじゃ！　藩の命令よ

り、百姓のいのちを重しとなさるのか！」
怒りに赤くなり、かみつくようなはげしさであった。
源昌房の大きな目がピカリと光った。頑迷な相手の態度に、おさえにおさえていたものがせきを切ったかと思われる様子であったが、おさえて、おだやかな声で言った。
「新兵衛どん。気を静めて、よく考えた上でものを言うて下され。おいは、百姓共を逃がす気はなかった、ただ殺されるのを助けたいとだけ思うていたと言うたのでごわす。それがどうして藩の命令より百姓のいのちを重しとなすということになるのでごわす。逃散を制止せよとの藩命ではあっても、殺せとの命令はごわすまい。
ただ不幸にして、おはんが足をふみすべらせて谷川におちこみなさったために百姓らがこちらの手のとどかん他領に逃げこんでしもうたというにすぎん。
だから、済まなんだとわしはわびを言うたのじゃ。おはんら四人が了解してくれれば、ことはそれですむのじゃ。こげんところに持ち出して、お頭をはじめ長老ン衆をわずらわし申すことはさらになかのじゃ。この理窟がどうして、おはん方にはわからんのじゃ」
じゅんじゅんとさとすような調子であったが、相手は納得しない。一層激昂した。
「おいが谷川に落ちこんだのが不覚じゃと言やるのか！そいじゃ、おいが悪いと言やるのか！」
さすがに、源昌房もかっとした。
「ばかもの！」
と、猛烈な勢いでどなりつけ、さらにつづけた。
「石頭にもほどがごわすぞ！　新兵衛どん、おはん、いくつだ！　その若さで、どうして人の言うことを素直にとることができんのじゃ！　お国のことを思うなら、もう少し広く深く考えたらどうでごわす。憂うべきを憂えず、あわれむべきをあわれむことができんような固陋頑迷な根性では、若い者とは言えんとは思やらぬか」
相手はいきり立った。
「謎立てのような言い方をせんで、はっきりと言いなされ。憂うべきこととは何じゃ！　返事の次第では聞きずてにはせられんぞ！　先刻からのおはんのことばにはゆゆしいにおいがある」
源昌房はもう興奮がしずまっている。
「おはん、礼記を読んだな。おいと一緒に習いに通ったことを覚えていやろう」
「習うても覚えてはおらん！　おいはおはんのような学者ではなか。薩摩の武士には学問なんどは形ばかりでよかことじゃ。お国にたいする忠義だけを心得ておれば十分じゃ」
ぷりぷりしている。
源昌房は微笑した。
「忘れているなら、くわしく言おう。大いにためになることじゃ。――礼記の檀弓篇にこげん話が出とる。

孔子が旅をして、泰山のほとりを通りかかられたところ、一人の婦人が新しい墓の前で泣いていた。その泣声があまりに悲しげであったので、孔子は車をとどめて、こうおたずねになった。

〝そなたの泣声を聞いていると、度々かなしい目にあった人のようじゃが、一体どんな目にあったのかな〟

女はこたえた。

〝仰せの通りでございます。このへんは悪い虎の多いところでございまして、その虎のため、昔わたくしの舅（しゅうと）どのが嚙み殺されましたが、この度また子供が食い殺されてしまいました。それでこんなにかなしんでいるのでございます〟

孔子は言われた。

〝そんなにおそろしい土地なら、どうして他に移らんのか〟

女はこたえた。

〝ここは虎の害はありましても、無慈悲なお取り立てがございませんので〟

孔子は嘆じて、お供していた弟子衆に仰せられた。

〝そなたら、よくおぼえておくがよいぞ。民にとって、苛政は虎よりもおそろしいものであることを〟

どうだの、この話を聞いて、今のお国のことを思い出しはなさらんか」

話が進むにつれて、人々の顔は青ざめ、おびえているような表情になっていたが、そこまで来ると、一斉にざわめき立った。

「けしからん！」

憤然として新兵衛がさけぶと、たちまち座中の方々から同じような声があがった。それに気を得たのであろう、新兵衛はおそろしい声でどなり出した。

「あんのじょうじゃ！　歴然たる謀反人のことばじゃ！　おはんはさっき、大塩平八郎のことを申されたが、その大塩の心になっていやるのじゃ！　聞き捨てにはできん！」

刀を引きつけた。左の拇指が鯉口をおしきっている。今にもすっぱ抜かんばかりだ。

新兵衛だけではない。他の青年らも血走った目でにらんでいた。青年らだけではない。長老らの様子も険悪になっていた。縁にはひる過ぎの明るい陽がさしこみ、軒にはさわやかな青空がのぞいているのに、座敷には緊迫した殺気が加速度的にこめつつあった。

それを知らぬかに、銀杏の葉が日に光りながらゆっくりと散りつづき、どこやらの高い梢で鳴くかん高いモズの声が聞こえていた。

夜這星（よばいぼし）

三十分ほどの後、源昌房（げんしょうぼう）は北郷（ほんごう）家を出た。通りには明る

い日がさしているが、生きて動くものはなに一つとして見えない。しかし、そのしずかな通りを行く源昌房の顔はいまいましげで、陰気であった。

「……ばかどもめ！　石頭め！　あのわかりやすか道理がまッでわからん……」

とたえずののしりつづけていた。

あの場は隼人介のとりなしで一応おさまった。

「そう殺気立ってはどもならん。わしの屋敷でごわすぞ。皆つつしみなされ。とにかく、この場はわしにまかせてもらおう」

と、隼人介は言ったのである。

まかせることになった。

「それでは、源昌房どんだけのこって、おはん方は一まずみな帰って下され」

といって、皆をかえした後、隼人介は源昌房に、

「そなたをどう処置してよかか、今のところわしにもわからん。二三日して呼ぶ故、それまで家でつつしんでいなされ」

と言いわたした。

「かしこまりもした」

源昌房はかえりかけたが、どうしても言わずにおられなかった。

「くどかようでごわすが、重ねて申しておきもす。この事件は皆が考えるほど重大なことではごわはん。みながわしの弁解をすなおに受取ってくれるなら、それですむことでごわす。重大なのは、こうまで厳重にとりしまっても逃散がやまんということでごわす。真にお国のためを思うなら、取りしまりなどより、他に講ぜねばならんことはなかと考えねばならんところでごわす。郷士頭でおわすオマンサアはなおさらのことでごわすぞ」

隼人介は不快な顔になった。源昌房のような立場にある者は、恐れ入っているべきで、こんな態度でこんなことを言ってはならないと思うのであった。

「とにかく、かえっていなされ。二三日したらまた来てもらう」

と、不興げに言った。

それでかえって来たわけだが、どうにも腹が立つ。どこを歩いているかもわからないほどであったが、やがて路面に銀杏の葉と実とがおち散っているのに気がついた。扇形の黄葉とぶよぶよした寒天質のものに包まれた実は、路面のいたるところにおちている。源昌房は目を上げて、わが家の巨樹を仰いだが、ふと、

「あす、この実を例年のように持って行ったら、隼人介サアはどげん顔をしなさるかな」

と思った。すると、おかしくなって、ニコリと笑ってしまった。

門から玄関まで行く間に源昌房の顔はすっかり明るくなっていた。

「熊吉、熊吉」
と玄関の前に立ったまま、大きな声で下男を呼んだ。
「へーい」
厩舎の方で、野太い返事がして、熊吉が土によごれた手を野良着にこすりつけながら走って来て、ひざまずいた。
「ご用は」
と仰いだ。堆肥のにおいがからだ中からにおっていた。年頃二十一二、せいはひくいが、骨ぐみのがっしりした、頬の赤い、屈強な若者だ。太い眉の下にまるい目が生き生きと光っていた。
「銀杏をひろえ。あげんおちていては、通る人に迷惑じゃ」
「へい。あとでひろいもす。今、積ン肥をしとりもすが、そいがすむと、葱にこやしをやらなりもはんから、そのあとになりもす。そいでようございもそ」
農事には段取りが大事であり、それを狂わせるとあとがひどく難儀なことになることを、源昌房もよく知っている。
「よか。しかし、日の暮れんうちに拾うんじゃぞ。夜になると、人が踏みつけて迷惑する」
「かしこまりもした」
この問答の間に、玄関に老婆があらわれていた。五十四五、半分以上も白くなった髪を切り下げにしている。
昔はずいぶん美しかったにちがいない。その年になっても品のある顔立ちだ。小柄なからだに男ものめいたこまかな薩摩がすりの着物をまとい、黒襦子の帯をしめている。胸許のじゅばんの襟が真白であるのがさわやかであった。源昌房の母であった。源昌房が下男との問答をやめてこちらに向くのを待って、言った。
「おかえりなされ」
「唯今でごわした」
礼儀正しくおじぎして源昌房が言うと、母は両手を出した。その手に、源昌房は刀を脱してわたした。
居間に入ると、母は小床の刀かけに刀をかけておいて、一旦台所に退ったが、すぐ茶道具と鉄瓶をたずさえてかえって来た。
ゆっくりと茶をいれて、息子にのませ、自らものんでから言う。
「どんなことになりましたかえ」
「隼人介サアへおまかせすることになりもした。二三日したら呼ぶ故来いとの、隼人介サアのおことばでございもす」
「そんなら無事にすんだのではなかのですかえ」
老母の声はふるえた。
「その通り。すまんじゃったのでごわす。よっぽどみなが立腹しとりもしてな」
源昌房の様子はうれしいことでも言っているようであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo